

綾部克人

暦デ十カ日メ物ロ語ン

遍歴綺譚

綾部克人

暦十日物語

遍歴譚

デカメロン
廣十日物語—遍歴綺譚

1994年 9 月21日 初版発行

著 者 綾 部 克 人

発 行 人 福 本 一

発 行 所 株式会社 スリーエーネットワーク

〒101 東京都千代田区猿楽町 2 丁目 6 番 3 号

電 話 営 業 03-3292-5751 松栄ビル

編 集 03-3292-6521

振替口座 東京4-89129

印刷・製本 三協美術印刷株式会社

不許複製

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-88319-016-1 C 0093 P1500E

贗
十^デ
日^カ
物^メ
語^ロ
語^ン

遍
歷
綺
譚

……文学だって？ とんでもない。拔萃だよ、人生の拔萃だよ。

ベーター・アルテンベルク

曆
十^デ
日^カ
物^メ
語^ロ
目
次

第Ⅰ話	メデューザの鬘 たてがみ	7
第Ⅱ話	ハーレム夜話	31
第Ⅲ話	旅人	55
第Ⅳ話	元上院副議長夫人の旗亭	77
第Ⅴ話	仏陀と豚	101
第Ⅵ話	ダマスの薔薇	119
第Ⅶ話	ラインゴールド	143
第Ⅷ話	緑の猟人	161
第Ⅸ話	テルヴェーレン公爵夫人	189
第Ⅹ話	D・Gの肖像	211

第Ⅰ話

メ
デ
ユ
ー
ザ
の
髪たてがみ

日はとつぷりと暮れ、カリブの夜は漆のように黒かった。

飛行場の構内を出るともう何も見えない。道は沼に沿って走っているとみえ、ヘッドライトに照らし出されるのは、丈高い葦の茂みばかりだった。勿論街灯などないし、人家の明りらしいものすらない。ヘッドライトがなかったら、鼻をつままれても判らない闇だ。月も星もなかった。蛙の声はやけに喧しい。それに混じって、茂みの奥から時折り不気味な動物の声が聞こえた。

ベランジェ君はハンドルを握りしめ、前かがみになってフロントグラスに額を押しつけんばかりに前方に眼を凝らしていた。

「注意には注意が必要です。右に寄り過ぎると沼に落ちますし、左には排水溝がありますから、タイヤがはまったら大変です」

彼はそう言いながら、右によろよろ、左によろよろする。

「運転が下手で申し訳ありません。実は一週間前に免許を取ったばかりなのです。でも、これはなかなか良い車でしょう。シトロエンの二十一馬力です。前任者から譲り受けました」

それを聞いて助手席の僕は青くなった。こんなところで、排水溝にでもはまって立ち往生しようものなら、夜が明けるまで誰も助けに来てくれる気遣いはない。手に汗を握るとはこのことで、車が酔っ払いのように右往左往する度にドアの把手を握りしめ、足を突っ張って、叫び

たくなるのを我慢するのだった。

つまり、飛行場にはマルチニック県庁ベランジェ官房次長が自ら私用車を運転して迎えに来てくれていたのであった。彼はスーツケースを下げた僕の姿を空港ロビーで目敏く見つけ歩みよって来ると、

「マルチニックによろこそ！ 私は県知事官房次長フィリップ・ベランジェです」と自己紹介し、僕のスーツケースを手にとった。

その頃、フランス海外県での政情不安がしきりに伝えられていた。海外植民地の独立はほぼ完了し、さしものアルジェリア問題もドゴール大統領の政治力によって最終的解決がもたらされたように見えた。その矢先に海外県で社会不安が生まれ、特にカリブ海に浮かぶマルチニック島では住民の暴動騒ぎが伝えられたのである。パリにある日本大使館の政務担当書記官だった僕は、そんな訳で実情を視察してくるようにとの用命を受け、はるばるパリから出張してきたのだった。パリを発つに先立っては、フランス海外領土省の次官から県知事あてに紹介の電報を打って貰っておいた。飛行場にわざわざ県庁官房次長が出迎えとは、実は免許取り立て一週間目のお出迎えとも露知らず、この紹介電の効き目かと北叟笑んだのも全く束の間というわけなのであった。

その上ベランジェ君は、官房次長とは名ばかり、まだ高等行政学院の学生で、研修生として三か月前からマルチニク県庁に派遣されているのだということも判った。しかしそう判ってみると、ベランジェ君は憎めない青年だった。二十七、八歳だろうか。鳶色の髪が鳥の巣のようにもじやもじやもつれ、色白の細面にかなり度の強い近眼の眼鏡をかけている。

「実は私も卒業後外交官を志望しています。でも、外務省に入るには、卒業成績が二十番以内でなければとても無理です。まだ、完全に希望は捨てていませんが……」
と彼は素直に言った。

車は漸く県庁所在地フォール・ド・フランス市の中心に入り、港に近い公園に沿った閑静な一角に止まった。もう十時を過ぎていた。

「ホテルはこのすぐ傍ですが、まず食事をしてしましましょう。チェックインはそれから遅くないと思います」

僕は、先にシャワーでも浴びて下着を取り替えたような気もしたが、ベランジェ君の指図に特に逆らう理由もなかった。

「あれがデスナンビュック提督の銅像です」

ベランジェ君が車のドアをロックしながら振り返って言った。見ると、手をかざして海の彼

方を眺めるような身振りの青銅の像があった。十七世紀の昔、宰相リシュリユーを説いて、イギリスやオランダとの植民地獲得競争に乗り出し、アンティレス諸島をフランス領とした人物だ。言ってみれば、ダルタニアンや三銃士の同時代人である。

「それから、ジョゼフィーヌ皇后の像がこの奥の方にあります。ご存知と思いますが、マルチニク生まれのジョゼフィーヌは、実はデスナンビュック提督の遠い子孫に当たるわけなんです」

ペランジェ君がフランス人のご多分に洩れない歴史好きであることは、これで明らかであった。大通りの横断歩道を渡ろうとすると、広場に足場が組まれ、雛段が作られているのが目に入った。僕は、

「あれは、来週のドゴール將軍の来訪のためですね」と聞いてみた。

「そうです。將軍はあそこで閲兵されてから、市庁舎のバルコンで演説されます。今は、その準備に首まで漬かっていますよ」

と彼は自分の喉を横に切るような仕草をしながら、しかし半ばは誇らしげに答えた。行政学院の学生の身分で、フランス大統領ドゴール將軍のマルチニク訪問準備に携わることが、光栄であり、誇りでない筈はなかった。

それから僕たちは裏道に入り、暫く歩いてから、街角の狭いレストランの入口を押して入っ

た。壁は薄いブルーのペンキで塗りたくり、奥に漁網が吊るしてあるのは装飾のつもりらしく、棚に埃をかぶった古いラム酒の空瓶がいくつも転がしてある。お世辞にもシックとは言い難いが、それでも僕たちが席に着くと、ボーイが来て、テールブルクローズを新しいものと取り替えて行った。ベランジェ君は、そのサービスが彼に対する特別の敬意の表現であることを強調するかのように、

「特製パンチをふたつ。ああ、いつもの」

と常連らしい態度で注文した。そして、

「マルチニックにいらしたら、ラムを飲んで頂くことは不可欠です」

と言ってから、ゆっくり店内を見渡して、

「パリならさしずめサン・ミシエルの裏にあるような店ですが、ここでは高級の部類です。味は良いので、いつもこのようにいっぱいです。ご覧のとおり、マルチニックは全く平静で、新聞を書くようなことは何もありませんよ。本当に新聞は人騒がせなことばかり書いて困ったのです」

と、ひとかどの官僚らしい口調で言った。僕は、「それでは大統領はわざわざ何をしに来るのか」と口に出かかったが、最初から相手を警戒させるようなことを言うのは止めておいた。間もなく、特製パンチがきた。それはラムをオレンジジュースとパイナップルジュースで割り、砂糖のシロップを加えて氷を入れ、オレンジの輪切りと桜桃の砂糖漬けを浮かせたという代物

で、甘ったるいのに参った。しかし、ベランジェ君の言うとおりで、その味はマルチニクの洗礼なのである。

やがてボーイが注文を取りにきて、僕は、アヴォカドのヴィネグレットに海亀のステーキをたのんだ。伊勢海老や魚類も新鮮だが、それならパリでも食べられないことはない。海亀のステーキだけは、ちょっとマルチニク以外では食べられないと、珍しがりの僕は今度は一も二もなく、ベランジェ君の勧めに従ったのだった。

料理が来るのを待つ間、彼は、ポケットから手帳を取り出しページをめくりながら、言った。「えーと、知事への表敬は月曜日の十一時半からとなっています。その前にホテルへ迎えに伺います。十一時十五分までよいでしょう。表敬訪問のあと、知事が最近着任したアメリカ領事の歓迎午餐会を催していますので、失礼でなければご出席頂きたいと言っております。ほかに何かご希望はありませんか。できるだけご希望に沿うようにとの知事の命令です」

僕は知事から県内情勢についてお話が聞ければ、あとはフォール・ド・フランスの市内見学をしたいと答えた。

「承知しました。お安い御用です。ところで、明日の日曜日はどうされますか」

僕が休養を兼ねてフォール・ド・フランスの港の辺りでもぶらぶらするつもりだと言うと、彼は急に椅子から乗り出して、

「宜しかったら、サン・ピエールへご一緒しませんか。ここから、車で小一時間のところですよ。ご存知でしょう。有名なブレ火山の噴火で全滅した街です」

と言った。勿論僕も、ボンベイと同じ運命を今世紀初めに迎ったサン・ピエールの悲劇のことは聞いている。

ベランジェ君は言葉を接いで、

「ドゴール大統領の訪問予定先にも入っていますので、私は市当局との打合わせにもう何度か行ってきましたが、一見の価値はあると思います」

と言う。そして、日曜日なのだという僕の躊躇を払いのけるように、

「いえ、私もどうせ日曜日ではかに何もすることはないので……それに、実はまだ自分の車で遠出をしたことがないので、運転の練習がてら、行ってみようと思っていたところなんです」

と言った。進退窮まるとはまさにこのことだった。サン・ピエールに行ってはみたし、フィリップ・ベランジェ官房次長の運転で往復二時間のドライブをするのは思うだに身の毛がよだつ。僕は考えてからあとで返事をする、取りあえずお茶を濁すしかなかった。

丁度その時だった。ベランジェ君が突然ナプキンをテーブルに置いて立ち上がった。見ると、赤茶けた色の髪が大分薄くなった四十がらみの大男が立っている。